
あと三日

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あと三日

【Nコード】

N4268V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夏休み終わりまであと三日。追い詰められた真央がすることとは。こうした経験がある人は多いと思います。

第一章

あと三日

まさにだ。絶対絶命の状況だった。

自分の部屋の机の上にある山の如きそれは。全くの手つかずだった。

彼女はそれを見て嘆息していた。そこにだ。

部屋に母親が来てだ。こう言うのだった。

「あんたこれまで何してたの？」

「遊んでたわよ」

こう母に返す彼女だった。顔に脂汗を垂れ流しながら。それはまさに蝦蟇の如くだった。

「それと部活」

「ソフトよね」

「ええ、正直今の今までね」

「宿題のこと忘れていたのね」

「綺麗さっぱりとね」

こうだ。仁品真央は母に答える。

黒髪は首まで完全に覆う長さにしていて髪と同じ色の眉を綺麗に切れ長気味にそろえている。目は大きく太いアーモンド型でありはつきりとした二重だ。顔は少し張りのある感じだ。ふくやかな雰囲気だ。鼻の形ははつきりとしていて高い。そして口は横に大きい。身体つきは少し丸い感じだ。しっかりとしているがウエストは細い。その彼女が上は白のタンクトップ、下は膝までの黄色のジャージ姿でだ。脂汗を流して机に座っているのだ。

そしてその宿題の山を見ながら。後ろにいる母に言った。

「夏休みってさ」

「この夏休みね」

「長いわよね」

誰も知っていることをだ。あえて母に言うのだった。

「四十一日ね」

「普通に一ヶ月以上あるわよね」

「長いって思ってたのよ」

また母に言うのだった。

「そう、長いってね」

「それで気付いたらだったのね」

「あと三日ね」

真央は再び言った。

「三日しかないのね」

「そうよ。三日しかないのよ」

「どうしようかしら」

今更といった感じの言葉だった。

「この状況は」

「どうしたらいいと思ってるの?」

「やるしかないわよ」

結論は出ていた。既にだ。

「もうね。この宿題を全部ね」

「あと三日でね」

「参ったわね」

まだ動かない。宿題を見ながら腕を組んでいる。

「三日で間に合うのかしら」

「間に合わせるしかないでしょ」

母の言葉は実に素っ気無い。

「それとも宿題踏み倒すつもりなの?」

「踏み倒したらね」

どうなるか。それは真央もよくわかっていた。

「市中引き回しのうえ打ち首獄門よ」

「厳しい学校ね」

「普通に一ヶ月特別授業よ」

どちらにしても厳しい。実は真央の通っている高校は勉強には厳しいのだ。とはいっても真央自身はかなりいい加減ではある。

「だから。何としてもね」

「やるしかないのよ」

「じゃあとりあえずはね」

「とりあえずは？」

「問題集をやっていくから」

最初にだ。個人的に一番面倒なものを終わらせるといっのだ。

「それからね」

「それから？」

「絵を描いてね」

「美術の宿題ね」

「そう、そのモデルは」

何にするか。真央は話した。

「ワラビにするから」

「ワラビなの」

「そう、ワラビね」

家で飼っている犬だ。種類はブリヤードだ。かなりの大柄で毛は長い巻き毛のブロンドだ。毛が長いので目が見えなくなっている。

第二章

そのワラビをだ。描くというのだ。

「美術はそうして」

「その他にはまだ何かあるの？」

「他の課題は適当に書いて」

毎日の記録の様なものはだ。そうするというのだ。

「あつという間にね」

「それで終わらせるのね」

「そうするわ。それで読書感想文は」

それもあつた。高校でもこれはしっかりとある。

「正直。読む本は」

「あんた本読まないものね」

「漫画は読むわ」

読むのはそれだった。

「昨日週刊少年チャンピオン読んでから」

「それは読書って言うの？」

「多分違うと思うわ」

何だかんだでその手にペンを持ってだ。そのうえで問題集を開きだ。問題を解きはじめている。何だかんだで問題を解くのはかなり速い。まるで答えをそのまま書いている様だった。

そうしながらだ。母に話すのである。

「読書ねえ」

「昔読んだ本とかないの？」

「伝記とか？えらい人の」

小学生が読む感じの本である。

「ベートーベンかしらね」

「ベートーベンね」

「耳聞こえなかったのよね」

このことで有名だ。しかし真央はこの音楽的には偉大な人物についてこんなことを言うのだった。

「それで性格は尊大で頑固で癩癩持ちで気難しかったのよね」

「凄く嫌われてたらしいわね」

「敵だらけだったのね」

「そうよ。ベートーベンには友達はいなかったけれど敵は山程いたのよ」

その代表がゲーテである。ある意味において素晴らしい。

「そういう人だったのよ」

「じゃあその人にするわ」

読書感想文はベートーベンの伝記になった。

「じゃあとにかくね」

「問題解いていくのね」

「それとね」

さらにだった。問題はまだあった。

「家庭科だけねど」

「お裁縫とかあんたできないでしょ」

「大の苦手よ」

できる筈もないことだった。真央は身体を動かすことは得意だがそれでもだ。そうした裁縫の類はだ。大の苦手なのだ。

だからだ。彼女は言うのだった。

「それはどうしようかしら」

「とにかく何とかしなさいね」

「わかってるわよ」

問題集を解きながら話していく。

「ちゃんとするから」

「とにかく。あと三日よ」

その三日でだ。終わらせろというのだ。

「頑張りなさいよ。気合入れてね」

「うっん、洒落にならないわね」

「本当に今まで何してたのよ」

「だから。部活に遊びに」

そればかりだったのだ。

「そういうことだけだったから」

「本当に。適当なんだから」

「青春してたの」

そういうことにしてしまう。自分に言い聞かせる。

しかしそうした話をしてだった。真央は。

とにかくまずは問題集を終えていく。何とか頑張ってた。

問題集は全てだ。徹夜で終わらせた。その朝にだ。

疲れきった顔でだ。朝食の時に母に話した。

「やったわよ」

「終わらせたの」

「問題集はね」

それはだとだ。へとへとになった顔で話す。

「何とかね」

「けれどまだ宿題残ってるわよね」

「次は読書感想文と美術よ」

その二つをまず挙げるのだった。

第三章

「それと観察日記みたいなのね」

「お裁縫は？」

「それは最後」

苦手なのでだ。後回しにするのだった。

「最後にするから」

「最後の日に終わらせるのね」

「そう、八月三十一日にね」

運命の日だ。学生にとって一年で最も嫌な日にだというのだ。

「やるから」

「まずはその三つなのね」

「それは今日にやるわ」

八月三十日にだというのだ。

「だからね」

「それじゃあ頑張りなさいね」

母はこう言いながらだ。娘にあるものを出してきた。それは。

「コーヒーとユンケルだった。その二つを差し出して言うのであった。」

「これで元気出してね」

「その二つを飲んでなのね」

「そう、気合入れて頑張りなさい」

そのカップの中のコーヒーとユンケルの瓶一本を見せながら真央に話す。

「女は体力よ」

「体力なの、女は」

「そうよ。お母さんだってね」

自分はだ。どうかというのだ。

「お父さんを手に入れるには身体張ったんだから」

「身体張ったの」

「そうよ。まさにトライだったのよ」
「そうしたというのだ。」

「それであのお父さん手に入れたのよ」

「うちのお父さんって」

真央の父の仕事は消防署員だ。事務関係だがその体格や外見はだ
まさにアンドレ「ザ」ジャイアントなのだった。本当に二メートル
を超えている。

「タツクルして効くの？」

「戦車でも吹き飛ばしそうだけれどね」

「そのお父さんにタツクルって」

「とにかくね。そのお父さんをゲットするのに身体張ったから」

「それでだとだ。母の話は続く。」

「あんたも頑張りなさいよ」

「わかったわ。それじゃあね」

話はいささか滅茶苦茶だったがそれでも決まりだ。そのうえでだ
った。

真央はまずは家の犬、そのブリヤードを描いた。デッサンなので
スケッチブックに細かく描いていく。しかしその絵はというとだっ
た。

母がその絵を見てだ。こう娘に尋ねた。

「ワラビってアザラシだったの」

「何言ってるのよ、犬よ」

「絶対に違うわね」

それを確信して言う母だった。誰がどう見てもだった。

そのスケッチブックの犬はだ。変に細くねじれた線で描かれてい
て空を飛んでいてだ。しかも手足がなく首が長い。それを見てはだ
った。

母にしてもだ。こう言うしかなかった。

「アマゾンにいる怪物？」

「だから違つから」

また否定する真央だった。

「犬よ。ワラビよ」

「ワラビに見せたら怒るわよ」

自宅の庭の犬小屋の前で寝そべっているワラビを見ながら娘に話
す。今二人は家の縁側に座つてだ。そうしてワラビを見てそれぞれ
話しているのだ。

「それが自分だつて言つたら」

「怒るかしら」

「怒るわよ。つていうかね」

「つていうか。どうしたのよ」

「あんた絵の才能無茶苦茶ね」
ないとは言わなかった。

「何て言つたらわからないわ」

「下手じゃないのね」

「下手つて域越えてるわね」

そうした絵だというのだ。

第四章

「これはね」

「まあとにかく。絵は描けてるから」

それはいけるといふのだ。

「安心していいから」

「安心ね」

「そう、安心していいから」

自分で言つてだ。こうしてその破天荒な絵を描いていく。その次は。

課題のその毎日書かなければいけないものはだ。昼食を食べながら適当に書いた。夕方にはもうそれは無事に書き終わったのだつた。

「これでよしね」

「どつという風に書いたの？」

「適当」

夕食前のテーブルで母にあっさりと返す。

「もうお天気もね。適当に書いたから」

「お天気もつて」

「いいのよ、そんなのは」

誰も覚えていない、宿題を受け取る先生もだと思つての言葉だ。

「全然ね」

「いいのね」

「そう、いいの」

本当に何でもないとつた調子だつた。

「まあこれはこれで終わったから」

「そう、終わったの」

「だからいいのよ」

こう母に返すのであつた。

「雨とか雷も書いておいたし」

「雪は？」

「勿論書いたわよ」

「そこまで適当なのだった。夏に雪を書く程だ。」

「それもね」

「何処までいい加減なのよ」

「いいのよ。とにかく次よ」

「終わらせた宿題のことは振り返らずだ。次に考えを向けていた。」

「それじゃあその次はね」

「読書感想文ね」

「そう、ベートーベンの伝記」

「やはり小学生が読む様な作品だ。」

「それについて書くから」

「ベートーベンね」

「とにかく耳が悪くて家庭的には恵まれていなくて」

「幸せな境遇だったとは言いがたい。だからこそ伝記になる様な偉人となっていると言ってもいい。しかしベートーベンはそれだけではないのだ。」

「あと性格は」

「それについても書くのね」

「とにかく気難しくて尊大で癩癩持ちで頑固だったのよね」

「物凄く付き合いにくい人だったのよ」

「そうだったというのだ。この人間性も今では有名になっている。」

「少なくとも人間としてはお世辞にも偉人とは呼べない。もっとも偉人と呼ばれる人間でもこうした人間は他にもいたりする。」

「敵だらけだったし」

「じゃあそれ書くから」

「そっちの方書くのね」

「だって。偉いとか格好いいとか誰でも書くじゃない」

「母に話しながらテープルの上に原稿用紙を出している。」

「そうでしょ。それじゃあね」

「ベートーベンのそうしたところを書くのね」

「書くわよ。早速ね」

「全く。おかしな感想文書くわね」

「いいのよ。そういうのが面白いんだから」

「こんなことも言ってるだ。そうしてであった。」

真央はそのいささか破天荒な読書感想文も書いていく。夕食とシヤワー以外は全て執筆とその他の細かい宿題にかけてだ。やはり徹夜してであった。

翌朝。これまた疲れきった顔で朝食の場で母に話した。

「終わったわ」

「そう、終わったのね」

「ええ、読書感想文も他の宿題もね」

「全部終わったのね」

「残るはね」

残る宿題は。何かというのだ。

第五章

「お裁縫よ」

「家庭科ね」

「一番の問題よ」

こつ母に言うのであった。

「一番の難敵よ」

「最強最後の難関ね」

まさにだ。それこそがだった。

「裁縫こそが問題なのね」

「参ったわね」

また言う真央だった。

「どうしたものかしら」

「やるしかないでしょ」

母の言葉は簡潔なものだった。

「それとも宿題すつぽかすの？」

「それはしないから」

真央は母に対してきつぱりと言い切った。

「というか宿題忘れたら大変なことになるから」

「シベリアに送られるの？」

「北朝鮮送りよ」

よりによつてそちらだった。

「もうね。独裁対象地域に送られるのよ」

「凄いわね。それは」

「例えだけれどね。流石にそれはないけれどね」

「まあね。そんな怖い学校実際にはないわよ」

「校庭のグラウンド五十周よ」

それがお仕置きだというのだ。夏休みの宿題を忘れた場合のだ。

「だから。何としてもね」

「やるしかないわね」

「やるわ。意地でもね」

こうしてだった。真央はだ。

その最大最強の難関に挑んだ。裁縫である。

見ればタオルを縫って雑巾を作っている。しかしだった。

一針縫う度にだ。指や手を刺してしまっていた。

「痛っ」

「また？」

「うっ、またよ」

苦い顔で母に答える。

「お裁縫って何でこんなに難しいのよ」

「雑巾作ってるだけでしょ」

「それでも難しいのよ」

彼女にとってはだ。まさにそうだった。

「こんなに難しいのって世の中にあるのね」

「何か行くみたいなこと言うわね」

「東大？そんなレベルじゃないわよ」

「もっと上なの」

「上も上よ」

裁縫を続けながら話していく。その間も指を刺してしまっ

「阪神を日本一にさせる位難しいわよ」

「そこまでのね」

「そうよ。ミシンを使ったら駄目って」

「あんなミシンも駄目でしょ」

「全然駄目よ」

とにかくだ。不器用なのだ。そんな真央にとってはだ。裁縫こそ

はこの世で最も苦手なものなのだ。だからミシンも駄目なのである。

「けれど実際に手を使うのはね」

「もっと苦手なのね」

「全然進まないわよ」

見ればその通りだった。怪我ばかりして全然進んでいない。

「どつしよつかしら」

「一日もあるじゃない」

母はあっさりとした口調で話した。

「そつでしよ。一日もよ」

「一日ね」

「そつ、一日もあるのよ」

こつだ。それだけの時間があるというのだ。

「しかもウンケルとコーヒーも飲んだじゃない」

「スツポンのエキスもね」

「だったら頑張れるわね」

「まあスツポンもあつたら」

頑張れると話す真央だった。少なくとも体力的には大丈夫だった。

しかも気力もだ。二日徹夜だったがそれでも充実はしていた。

第六章

だがそれでもだった。進むのはだ。

怪我ばかりしてだ。全く進まないのだった。

「けれどね」

「だから。一日頑張りなさい」

「それしかないのね」

「御昼御飯と晩御飯は奮発するからね」

母は娘に人参を出した。

「だから頑張りなさい」

「御昼何なの？」

「五目焼きそばよ」

真央の好物だ。海の幸をふんだんに使ったものだ。

「それで晩はハヤシライスよ」

「あっ、いいわね」

昼と夜のメニューを聞いてだ。真央もだった。

笑顔になつてだ。それで話すのだった。

「それじゃあ頑張れるわ」

「食べ物、それも美味しい料理は何よりのカンフル剤よ」

「そうよね。とてもね」

「よし、じゃあ私頑張るから」

「気合入れてね」

こんな話をしてだった。真央はその最後の敵に向かうのだった。

何度も何度も指を刺して傷だらけになってだ。真夜中になり。

遂にできた。その雑巾がだ。

彼女はその雑巾を見てだ。満足した顔でいた。その娘にだ。

母はだ。ハヤシライスを差し出しながら笑顔で言うのであった。

「遂にできたのね」

「何とかね」

できたのだ。真央はどうだ、といわんばかりの顔で母に返す。

「できたわ」

「おめでどう。ただね」

「ただ？」

「随分と壮絶ね」

母はその雑巾、真央が縫い終えたものを見て話す。その雑巾はだ
まず縫い方が酷かった。あちこち波打っておりしかも千人針の如
く雑然となっている。何処がどうまとまっているのかわからない程
だ。

しかもだった。それに加えて。

雑巾のあちこちにだ。血がついていた。その血こそは。

「あれだけ刺していたらね」

「うん、やっちゃったわ」

真央もそれは自覚して言う。

「どうしようかしら」

「まあ仕方ないわね」

「仕方ないの？」

「できたものは仕方ないわ」

だからだ。いいというのだ。

「もうできたらね」

「じゃあこれのまま提出しろっていうのね」

「それとも出さないの？その雑巾」

「出さないと炎天下のグラウンド五十周だから」

流星にそれは嫌だという真央だった。

「絶対に出すわ」

「そうするべきね」

「せめて洗濯したいけれど」

それで血も僅かだが落としたいというのだ。しかしだった。

それをすればどうなるか。真央もそれはわかっていた。

「今から洗ったら。乾くのは」

「微妙なところね」

「出すわ」

仕方ないといった口調で母に話した。

「そうするから」

「そうしなさい。いいわね」

「ええ、それじゃね」

こう話してだった。結局その宿題をそのまま提出することにしたのだった。

こうして真央は宿題を全部提出した。しかしであった。

まずはだ。絵について言われるのだった。

「……これ何だ？」

「何でしょうか」

「仁品、これは何だ？」

美術の先生は呆然としながらスケッチに描かれているその謎の生物を見ながら真央自身に問うた。

第七章

「地球の生き物か？」

「犬です」

はつきりと答える真央だった。

「これは犬です」

「犬なのか」

「そう見えますよね」

「見えないから聞いたんだが」

まだ呆然としている先生だった。

「ちよつとな」

「そうですか？」

「ああ。けれどとにかく宿題はしてきたか」

その奇怪な生物を見ながらだ。先生はとりあえず自分を納得させた。

「それならこれでいいか」

「それで得点は」

「測定不能だな」

アザラシにも蛇にも見える怪生物を見ながらの言葉だった。

「これではとてもな」

「けれど宿題は出しましたよね」

「ああ、それはな」

そのことはだ。事実だと先生も認めた。

そのうえでだ。真央にこう話した。

「じゃあ皆の作品と一緒にな」

「スケッチのコンクールに出してくれるんですね」

「分け隔ては教育として最低の行為だ」

もつともそれを平然とする教師ばかりだ。それが我が国の教育だ。
「そんなことはしないからな」

「有り難うございます」

「まあこっちはそれでいい」

美術の方はだというのだ。

「ご苦労さん」

「有り難うございます」

美術はこれで終わりだった。そして課題は先生に胡散臭い目で見られた。だがそれも終わり最強最後の難関はだ。先生にこう言われた。

初老の少し太った女性の教師だ。彼女は真央の雑巾を見てだ。すぐに困った顔になってだ。それでこう彼女に問うたのであった。

「ええと、雑巾ですよね」

「はい、そうです」

「確かに雑巾ですが」

大きさや形を見ればだ。そうとしか思えない。

だがそれはだ。どうにもだった。

「ですが。これは」

「おかしいですか？」

「何といたしますか」

まさに奥歯に何かが挟まった口調だった。

「これはその」

「駄目でしょうか」

「いえ、雑巾なのはわかりますから」

まだ一度も使っていない筈なのにボロボロになっていてしかもあちこち血で汚れてドス黒くなっているその雑巾を見ながらの言葉である。

「ですから合格です」

「有り難うございます」

「合格は合格です」

こんなことも言う先生だった。

「それに努力もされましたね」

「えっ？」

「仁品さんの手を見ればわかります」

その傷だらけの手、バンソウコウを何枚も巻いているその手を見て言うのだ。

「大事なことはです」

「大事なことは？」

「努力です」

この先生もだ。教育者としての節度を守っていた。立派である。当然であるがそれができている教師は戦後急激にいらなくなっているからだ。

「それをされましたから」

「私は別に」

「努力は見えるものですから」

真央の謙遜はここではいいとしてだった。

第八章

そのうえでだ。さらに話すのであった。

「この雑巾は受け取らせて頂きます」

「それじゃあ」

こうしてだった。雑巾も受け取ってもらい夏休みの宿題は全て終えたのだった。そしてそれから暫く経ってだ。真央に思わぬ話が来た。

母は真央からそのことを聞いてだ。驚いて言うのだった。

「あの絵が!？」

「そうなの。特別賞になったのよ」

「何でそうなったの!？」

目を丸くさせて娘に問う。二人で夕食を食べながらの言葉だ。父は残業で留守だ。亭主元気で留守がいいということである。娘にとつても。

「それはまた」

「それはね。あれなのよ」

「あれって？」

「独特のデザインだって言われてね」

「それでだというのだ。」

「それでなのよ」

「独特のなの」

「ピカソとかそういう感じに思われたみたい」

「成程ね。そういうことなのね」

話を聞いてだ。母も納得した。

「ピカソね。そういえばそうよね」

「それもまた芸術だってね」

「芸術ってわからないわね」

母は自分が作ったカレイの煮物を食べながら話した。

「あれも芸術なの」
「そんなに驚くこと？」
「だって。アマゾンにいる怪物みたいだったじゃない」
「アマゾンに怪物いるの？」
「いるでしょ。あそこには」
人類にとつて最大にして最後の秘境だ。こう言うのも母の中では当然だった。しかし流石にアマゾンでも怪物は存在していない。だがそれでもだ。母は言うのだった。娘のその絵について。
「ああいうのも」
「いるのね」
「多分ね。とにかくよ」
「入賞よね」
「本当に世の中つてわからないわね」
また言う母だった。
「けれど何はともあれね」
「よかったわよね」
「ええ、おめでとう」
母としてだ。娘に祝いの言葉を贈った。
「何はともあれ宿題も終わったしね」
「最高の結末よね。どうやら私って」
「あんたは？」
「土壇場で力を発揮するタイプなのね」
「こうだ。ゴーヤチャンプルを食べながら笑顔で話すのだった。」
「そうなのね。それじゃあね」
「今度は何なのよ」
「これからもぎりぎりまで何もしなくていいわね」
「駄目よ、それは」
母はそのことはすぐに止めた。
「絶対に止めなさい」
「駄目なの」

「駄目よ。また連日徹夜するつもり？」

「そうしてだけれど。駄目？」

「徹夜みたいに無理をしたら駄目よ」

「これも母親としての言葉だった。」

「毎日少しずつやりなさい。いいわね」

「何だよ。ぎりぎりになつたら全部できるからいいじゃない」

「そういう問題じゃないの。まずはね」

「まずは？」

「いつも少しずつ努力すること。継続は力なりよ」

「何か面白くないけれど」

母の言葉に無然としてだ。真央は言うのだった。

「できるんなら最後の最後でいいじゃない」

「だから駄目よ。そんなことはしないの」

あくまでこう言うてだ。母は真央のそうしたことは注意するのだった。そうして娘のそうした態度はだ。何があっても止めるのだった。娘はあまりわかっていない感じであったが。

あと三日 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268v/>

あと三日

2011年8月2日03時28分発行